

2021年7月25日 聖餐式説教

さきほど読んでいただきました本日の旧約聖書は、北イスラエル王国で活躍した預言者エリヤとその弟子であったエリシャの別れの場面が選ばれておりました。エリヤと言えばイザヤ・エゼキエルと並ぶ三大預言者の一人であり、当時人々の間に深く入り込んでいたバアル宗教に毅然と立ち向かい、人々をバアルから離れさせて主なる神に立ち戻らせた人として有名です。

今やエリヤの預言者としての働きは終わり、エリヤは主なる神のもとへ行こうとしていました。しかしエリシャはそれがどうしても受け入れられません。エリヤが主なる神に命じられるまま歩いていくのについていきました。エリシャは、自分がエリヤと離れずにいれば別れなくてよいと考えていたのでしょう。しかしエリヤとエリシャの別れは決定的なものでした。人間の力では到底考えられない、また抵抗不可能な力でエリヤは天に上っていったのでした。エリシャがいくら叫んでも、もはやエリヤを求めることは出来なかったのです。

私たちは主の定められたときにこの世に生まれ、定められたときにこの世を去ります。本日のエリヤのようにすべては主の御手のうちにあるのを思わされます。この世の人生は、主より与えられた尊い有限の時であり、立派な信仰の実をあげることが求められているのです。

さきほど読まれました本日の福音書は、5千人の人々を主イエスが養われた後、主イエスが弟子たちを舟に乗せて向こう岸へ渡られた記事が選ばれておりました。主イエスは大きな奇跡をなさった後、必ず一人退かれて祈るのが常でした。弟子たちにもそのように教えておりました。これは人々が業の大きさだけに心を奪われてしまい、主イエスが本当に人々に伝えようとしていた天国から心が離れてしまわないためでした。主イエスは常に、主なる神との祈りを欠かしたことはなかったのです。

ところが舟は逆風に難渋しておりました。舟には弟子になる前このガリラヤ湖で漁師をしていたペトロ・アンデレ・ヤコブ・ヨハネもいたわけですから、いかに大変な逆風であったかがわかります。主イエスはその様子をご覧になって歩いて舟までいかれ、船に乗り込まれると風は止み、弟子たちは危険を避けることが出来たのでした。

この物語から本日は2つのことを学んでみたいと思います。

一つはこれがたとえ話であるということです。湖は世界を、舟は教会を表しております。私たちの生きるこの世界は、大きな激動の中にあります。来年21世紀を迎えようとしている今、世界はまた大きな変化の途上にあります。教会はかつてなかったほど大きな変化の中で揺れ動いております。時には世界の動きに沈んでしまうのではないかと思うようなこともあります。しかし私たちが忘れてはならないのは、教会という舟には主イエスが乗っておられるということです。主イエスと教会は一体であり、すべては主イエスの業として教会の働きはなされていくのです。

もう一つは、主イエスの働きは、決してこの世の常識で考えられることではないということです。弟子たちは主イエスが湖の上を歩いてこられるのを見て恐れしました。人間が湖の上を歩けるはずはない、そんなことをしたら沈んでしまう、そんなことは出来るはずがない、そうした気持ちが、この時の主イエスを幽霊だと思わせたのでした。普段主イエスの大きな業を見、またこの直前に5千人の養いを見たばかりの弟子たちでした。しかし彼らはまだ、主イエスを自分たちの常識の中で見ていたのです。主イエスの教えや業を、私たちは自分の常識に入れ込んではいないでしょうか？。私の業を思い起こしなさい、この世の常識では図りしれない業をすべてのキリスト者は見ているはずである、それを思い起こし、主イエスへの信頼を新たに、また確固たるものとしていきなさい。本日の福音書はそのことを教えております。本日の使徒書にありましたように、わたしたちは主によって一つとされ、わざと心を合わせて主のために働くため召されているのです。主の導きを祈りながら、主なる神の存在を日々新たにしていまいりましょう。